

最優秀賞

『永遠の出口』 森絵都著（生田新書・文庫 集英社文庫；も-27-1）

文学部 1 年 齊藤未来

どうしてわたしたちはこんなにも、この物語に惹かれるのだろうか。

舞台は七〇～八〇年代。どこにでもいる普通の女の子・紀子の、小三から高校卒業までを描いた連作集である。ぐれかけてみたり、徐々に落ち着いてみたり、幸せの絶頂と突然の失恋とを経験したりしながら、紀子は大人になっていく。

決してドラマチックではない紀子の青春。にも関わらずこの作品が、何度も何度も読み返したくなる力を持っている理由。それは「限りあるものほど、いとおしく思える」という、本当に大切だけれど日常に忙殺されて忘れがちなことを、はっとするほど深く強く感じさせてくれるからではないだろうか。

この作品にはたくさんの別れが描かれている。学校を卒業する、反抗期からどうにか脱出する、アルバイトを辞める、初めてできた彼氏とさよならをする……。それぞれの別れに臨む紀子の心境は少しずつ違っていて、そのことが紀子の成長を繊細に浮かび上がらせるのだ。

特に第九章「卒業」の描写は見事だ。小学校の卒業式では淋しさに押しつぶされそうで、中学校の卒業式では刑期を勤めあげた囚人みたいな気分だった紀子は、「ごくまっとうな、門出のような気分で」高校を卒業する。失恋のダメージによって一時は人生をあきらめていた紀子は、ある発見をきっかけにとことん自分自身と向き合った末にその日を迎えた。言葉で表現しがたい不安と自分探しの経験は、わたしたちの誰もが通ってきた道ではないだろうか。紀子が懸命にもがく姿を通して、わたしたちはあのひりひりするような痛みを追体験する。そして全編読み終えたあとには、大したことは起こらなかったはずの自分の青春が、今振り返ってみるとこんなにもきらきら輝いて見えるのはどうしてなのかが感じられる構成になっているのだ。

エピローグの紀子は、今で言うアラサーになっている。「どんな未来でもありえたのだ」とどっしり構えた紀子は、将来に悩むわたしたち大学生の背中を押してくれる。さしずめ人生の先輩と言えるだろう。もう制服を脱ぎ捨てた年齢の人にこそ手に取ってほしいこの本。卒業アルバムを開くときのような、胸がきゅっとなる切なさを、きっと味わえるはずだ。